
インドにおける多様性と創造性の解明
ラージャスターン州メーワール地方の宗教儀礼を例として
Cultural Diversity and Creativity in India;
A Case Study on the Religious Ritual in the Mewar Region, Rajasthan

H27助人25

- | | | |
|-------|-------------------------|---|
| 代表研究者 | 八 木 匡 | 同志社大学 経済学部 教授 |
| | <i>Tadashi Yagi</i> | <i>Professor, Faculty of Economics, Doshisha University</i> |
| 共同研究者 | 田 辺 明 生 | 東京大学 総合文化研究科 教授 |
| | <i>Akio Tanabe</i> | <i>Department of Cultural Anthoropology</i> |
| 共同研究者 | 福 原 隆 一 | 同志社大学 創造経済研究センター 嘱託研究員 |
| | <i>Ryuichi Fukuhara</i> | <i>Research Fellow, Center for the Study of the Creative Economy, Doshisha University</i> |
| 共同研究者 | ツトム・ヤマシタ | アーティスト |
| | <i>Stomu Yamash'ita</i> | <i>Artist</i> |
| 共同研究者 | 迫 田 さ や か | 同志社大学 経済学部 助教 |
| | <i>Sayaka Sakoda</i> | <i>Assistant Professor, Faculty of Economics, Doshisha University</i> |

This study undertakes quantitative analysis on the Gavari festival in the Mewar region of Rajasthan in order to investigate its social and economic implications for individuals and communities in terms of cultural diversity. We surveyed over 1,000 individuals (500 performers and 500 audiences) in more than 200 communities in rural and urban/peri-urban areas within 100 km of Udaipur city, the center of the Mewar region. The Gavari festival, often described as a folk drama theater, is the ritual religious and historical stories and epics. It is a dance drama performed only by male Bhil tribal members of a village over a forty-day period before the harvest season in September. During the month of Gavari the men travel long distance to several villages, originally to which their sisters and daughters have been married. Historically, Gavari expresses a continued interest in the health and happiness of their departed women. Nowadays, they also visit places without any kinship upon request to pray for their good.

The Bhil historically is the indigenous tribe which has resided in the forest areas so that the Gavari is the rural festival. However, due to the changes of socio-economic situation in India, many Bhils have started to live in urban areas and be engaged in non-farming works. Accordingly, the Gavari may change in many aspects. Absence from work for forty days must be an economic burden for urban workers, but some manage to continue their ritual ceremony as much as possible in spite of their potential economic losses. This survey reveals that Gavari is not only performed as the traditional ritual for Bhil communities but functions the social common capital in the whole society of the Mewar region by involving different social classes as hosts and audiences. Consequently, it suggests that performing Gavari may cause economic losses in the short term, but contribute to increasing the social wellbeing in the long run by tightening the relationship among communities and different social classes.

研究目的

この研究はインド西部ラージャスターン州の指定部族ビール (Bhil) による伝統的な儀礼演劇ガウリ (Gavari) を調査対象として取り上げ、計量経済学的な分析を行い、持続可能な開発においても重要性の認識が高まっている文化多様性の持つ含意を詳細に検討するとともに、共同体の固有の文化が個人の幸福や地域全体の経済的・社会的厚生に対してもつ意味を明らかにしようというものである。グローバリゼーションは経済発展をもたらすと同時に地域社会における格差の拡大や貧困を引き起こす。本研究が調査対象とする社会もその影響からは逃れられないが、一方で近代的な経済合理性の観点から見れば不合理なほどのコストのかかる固有の文化伝統を根強く維持している。本研究ではこうした伝統的宗教的行事を経済的厚生にとって無意味なものと同前提せず、その維持こそが狭義の合理性とは別の次元で獲得される「豊かさ」の保持増進に貢献するという観点に立つ。その上で、地域社会全体の中でのガウリの意味づけを近年GDPでは計測できない個人や社会の生活の豊かさを測る指標として研究が進む個人の「主観的幸福度」の観点から量的な実証分析によって検証を試みている。

ビールはインド社会の社会的にも経済的にもマイノリティに位置づけられる「指定部族」の1つである。ラージャスターン州メーワール地方に居住するビールは儀礼演劇ガウリの挙行を独自の伝統としている。ガウリは、毎年8月半ばに同じ村落出身のビールの男性たち30人程度が村ごとに演じ手集団を組み、40日間様々な集落を巡回して演ずるものである。ガウ

リの巡回先から渡される「お布施」は1ヶ月あまりの直接機会費用と比べると極めて小額である。例えばBanajee&Duflo (2012) は、貧困ゆえに投資をせず目先の娯楽に支出している例としてラージャスターン州の貧困層が所得の14%を祭事に消費していると指摘し、こうした行為が貧困脱却の障害であることを示唆している。しかし、三尾 (1994) が指摘しているようにガウリが宗教的儀礼であり、娯楽としての演劇の要素もあり、同時に社会的紐帯を保持・強化する機能を持つことを鑑みれば、人々がガウリを維持し続けることは社会関係資本への投資として決して不合理な行動といえないのではない。本研究ではこの仮説を検証すべく現地NGOの協力を得て、(1) ガウリの担い手世帯の社会経済的状况 (2) 当該集団の文化的宗教的行動 (3) 当該集団の出身村の社会経済的ならびに文化的状況についての基礎調査及び計量経済学的な実証分析を行った。

概要

1. 研究目的

この研究はインド西部ラージャスターン州の指定部族ビール (Bhil) による伝統的な儀礼演劇ガウリ (Gavari) を調査対象として取り上げ、伝統的宗教的行事が狭義の経済的合理性を超えて、その維持こそが別の次元で獲得される社会的厚生や「豊かさ」の保持増進に貢献するという仮説に基づき、現代インド社会の「多様性」を理解する一助として個人と地域社会全体の中でのガウリの意味づけを、(1) ガウリの演じ手世帯の社会経済的状况 (2) 当該集団の文化的宗教的行動 (3) 当該集団の出身村の社会経済的状况についての戸別調査及び計量経済

*1：指定部族とは、ヒンドゥー教やイスラーム教などの大宗教に属さず、固有の文化を保ちつづけてきたとみなされる先住民コミュニティを指す名称である。インド憲法第342条にもとづき、大統領令によって州または州の一部ごとに指定部族 (Scheduled Tribes) が設けられており、500以上の指定部族、約5000万人が認定されている。

学的実証分析を行う。

2. 研究対象

本研究の対象地は州の南部に位置するウダイプル県の県都ウダイプル市を中心とした地域で、インド独立まで存在した藩王国の名に因みメーワール地方と呼ばれている。この地方のビールは儀礼演劇ガウリの挙行を独自の伝統としている。ガウリは毎年8月半ばに同じ村落出身のビールの男性数十人程度が集団を組み、40日間様々な集落を巡回して演ずるものである。元々は親族の嫁ぎ先に訪問して縁戚となった集落の繁栄を祈るという目的のものであった。ガウリの季節が近づくとボーパと呼ばれる各集落のシャーマンが女神と交信しその年にガウリを演じるかどうかが告げられる。しかし、職業的宗教者であるボーパ以外の演じ手は、普段農業や土木作業に従事している演劇の素人であり、彼らが仮装をして女神を始めとした様々な役柄を演じ歌い踊る。この期間、彼らは就業せず飲酒や性行為も控え、女神への奉仕に身を捧げることになる。元々は農閑期の祭礼であり、その期間に就労しない経済的影響は少なかったと考えられるが、近代化に伴い都市労働者や国内国外への出稼ぎに従事しているビールが増えている。一方で、その機会損失にも関わらず祭礼に関わるビールは多く、この祭礼が個人と地域共同体にとってどういう含意があるのだろうか？

3. 研究手法と調査結果

2016年3月と9月にウダイプル市ならびに近郊の農村地帯で現地調査を行い、演じ手集団や観客への聞き取りを行った。この調査に基づいて「経済学的に見てガウリに参加することは非合理的であるにも関わらず、なぜ参加するのか？」という点の検証を、関係する人々の社

会経済状況から分析すべく調査を行った。質問項目として、世帯の就労、所得状況、家計支出、教育以外に祭礼に関する行動などの質問項目に加えて、空間的分布を把握するために訪問地、さらにガウリ期間中についての主観的幸福度など約350項目について聞き取りを行った。最終的な有効サンプルサイズは1027、ここにはガウリの演じ手500が含まれる。

インドでは貧困が社会階層と深く結びついており、貧困人口の80%が後進カースト、指定カースト、指定部族であるとの報告もある。ガウリを担うビールも例外ではなく調査対象者の平均所得(15,170ルピー)はインドの平均(100,000ルピー)を大幅に下回っている。40日間就業しないことの機会費用は平均所得から考えると大きなものであり、ガウリに参加することは経済的には非合理的な選択に見える。にもかかわらず80%以上の演じ手が必ず参加すると回答しており、女神への信仰や共同体の繁栄といった理由が過半数を占める。またガウリは親族との紐帯を確認するだけでなく、他の社会階層が多数を占める共同体でも上演してその繁栄を祈るものでもある。そこで今回初めてメーワール地方でのガウリの地理的な分布を調査したところ、この地方を網羅的にカバーするように上演されており、他の社会階層が広く観客や受け入れ先としてガウリに参加していることがわかった。

4. 結論

今回の調査結果から、ガウリはビールの共同体の枠を超えて、演じ手集団が他の共同体を訪れる、受け入れられるという行為を通じてメーワール地方全体に浸透しており、言わば「社会関係資本」として、同族や他の社会階層との紐帯を強化する機能を担っている可能性があることがわかった。こうした祭礼こそが実

はインドの多様かつ重層的な社会を維持する包摂装置としての役割があり、短期的な経済成長の阻害要因として捉えるのではなく長期的な社会全体の厚生に貢献していると理解することが重要であろう。今回は未だに全貌が未知であるガウリのごく一部を調査したに過ぎず、今後こうした祭礼がどのように個人の幸福度と社会全体の厚生に寄与しているのかさらに詳細に調査・分析する必要がある。

－以下割愛－